

げんえきJ Sのあさは、はやい。

あたしはまえのひにセットしておいためざましどけいになりだすおとで、めざまめた。これはこのまえのクリスマスでサンタさんにもらった、たいせつなもの。あたしはゆっくりとからだをおこし、おもいまぶたをあけた。

からだじゅう、ぎしぎしする。きのう、ともだちとあそびすぎたみたい。こおりおに、いろおに、たかおに。あたし、おにごっこだいすき。

リビングにいくと、「これをたべてね」ってメモが置いてあって、テーブルにあさごはんが置いてあった。まだひえていないところからかんがえると、すこしまえまでママはいえにいたってことかな。もうすこしはやくおきればよかった。

ひとりきりのあさごはんは、さびしい。でもパパもママもおしごとがいそがしいからしょうがない。だからあたし

は、くまさんのぬいぐるみと、うさぎさんのぬいぐるみを、それぞれパパとママのせきにおいた。やさしそうなめをしていくまさんが、パパ、すらっとしたびじんのうさぎさんが、ママ。これでもうさびしくないよ。だいじょうぶ。あたしはかべにかかっている、おじいちゃんとおばあちゃん、のしゃしんにむかつてはなしかける。

あたしがうまれるすこしまえに、ふたりはいなくなってしまった。ママはおそらのむこうにりょこうにいつてしまった、といっていたけれど、あたしはわかつてしまった。みんなだ。しんでしまったひとはいなくてこない。せんせいがみんなにおしえてくれた。みんなはいまいちわかってないみたいだったけど、あたしはわかつてる。あたしのおじいちゃんとおばあちゃんはもうにどと、りょこうからかえってくることはないんだ。

でもせんせいは、しんでしまったひとは、すぐちかくでみんなをみまもってくれてるっていった。だからだいじょうぶ。あたしのことをまもってくれてる、おじいちゃんやおばあちゃんがしんぱいしないようにしなきゃ。あたしはさびしくなんてない。パパやママはおしごとがいそがしい

だけで、ちゃんとあたしのこと、あいしてくれてるもの。
しんばいしなくてもだいじょうぶよ。おじいちゃん、おば
あちゃん。

あさごはんをたべおわると、もうそろそろがっこうへい
くじかんだった。ごちそうさま、をしてから、あたしはさ
らをだいどころまでもっていった。こうすればママがよろ
こんでくれる。ついでにおさらもあらっておきたかったけ
ど、あいにく、じゃぐちにせがとどかない。きつと、にね
んせいになつたらとどくようになるとおもう。

みじたくをしたら、ランドセルをかついでがっこうへし
ゆっぱつ。きょうはなにをべんきょうするのかな。ともだ
ちといっぱいあそびたいな。

「サオリー」

「ミカー」

きょうしつにはいると、しんゆうのサオリがあたしのこ
とをまっついてくれた。おもわずだきつくくと、サオリはあ
たしのことをだきとめてくれた。だいすき。

サオリはすつごくおしゃれで、いつもかわいいおようふ
くをきている。あたしもサオリみたいになりたいな。

サオリはあしをぶらぶらさせながら、かんじドリルをと
いていた。あれ？ これはきょうまでにやってくるしゆく
だいだったのに。サオリつたらわすれていたらしい。

「サオリーせんせいにおこられるよー」

「うう、じゃあせんせいにはないしょにしててよミカ」

「いいよー」

ほんとはあたしもかんじドリルをやるのわすれてたんだ
もの。サオリにかんしやしなくちやね。

じゆぎようがはじまると、あたしはこっそりつくえのか
げにかくして、かんじドリルをといた。べんきょうはにが
て。はやくきゆうけいじかんにならないかな。かんじをか
くのもあきちやったから、あたしはノートのはじつこにく
まさんとうさぎさんをかいた。やっぱりあたしのパパとマ
マにそっくり。もうどれくらいパパとママとおしゃべりし
てないんだろう。

なんだか、はなのおくがツンとした。

がっこうからかえるとちゅうで、あたしはおにいちゃんにであつた。とはいつても、ちがつながっているおにいちゃんではない。あたしにはきょうだいがない。

いちねんせいにあがつたとき、あたしにはあまりともだちがいなかった。そんなとき、ともだちになろうよ、ってこえをかけてくれたのがおにいちゃんだった。

おにいちゃんはパパやママとちがつてふつうのおしごとをしていない。いちおう、おうちのあんぜんをまもるおしごとをしているらしいけど、あたしにはよくわからないしきょうみもないからいわないことにしている。

「おにいちゃん、おはようございます」

「ブヒィ！」

おにいちゃんは、あたしとはなすとき、たいてい、はないきがあらいい。おはながつまっているのかな？ はやくびよういんにいったほうがいいよ、というと、ロリコンびようはえいえんになおらないんだよ！ とおにいちゃんはさげんだ。そんなにこわいびようきがあるのをしらなかつたから、あたしはおもわずないてしまった。えいえんにおはながいたいびようきなんて、あたし、もしもかかつてしま

つたらたぶんかなしくてたまらない。するとおにいちゃん
は、だいじょうぶだいじょうぶ、ミカちゃんはやさしいこだ
ねえ、といって、いぬみたいにあたしのあしをなめた。く
すぐつたかつたけど、これはじえんとるめん？ のマナー
らしいからがまんした。あたしもしょうらいレディ——お
ひめさまになりたいからだ。

「ミカちゃんのばんつほしい」

おにいちゃんはじょうだんをいうのがすきで、よくこな
なことをいつてくる。いままできいたことがない、それこ
そテレビにでているげいにんさんすらいわれないような、ざ
んしんなじょうだんがおおいから、あたしはおもわずわら
つてしまう。

「おにいちゃん、じょうだんはかおだけにしてね」

「ブッヒィ」

おにいちゃんはかなしそうなかおをつくって、うなだれ
た。あたし、おにいちゃんがこころのそこからかなしがっ
てるとおもえない。だっておにいちゃんつたら、うれし
そうによだれをたらしているんだもの。

そのままあたしはおうちにかえろうとした。でも、おう

ちにはだれもないことにはさまらながらきづいた。

パパもママもよるおそくにかえってくる。あたしはいつもがんばっておきていようとすけれど、いつだってねむりこんでしまう。

まえにえほんでよんだことがある。ゆめのせかいのかみさまはきびしくて、こどもがねむらないでいると、ねむりのまほうをかけにくるって。あたし、すっかりへやのドアをしめていたのに。やつぱりかみさまだから、ドアもまほうであけちゃうのかな。そんなのっていじわるだよ。

あたし、パパとママをでむかえたいだけなのに。

ふときづくと、おにいちゃんがあたしのめからこぼれたなみだを、ハンカチでふいてくれていた。おろおろとしたようすで、あたしのことをきづかってくれてる。

おにいちゃんはやさしい。いつもブヒブヒうるさいけど、やつぱりだいすきだ。

「ミカちゃん……」

なみだをぬぐって、あたしはおにいちゃんをみつめ、にっこりわらった。

「これは……」

これが、あたしのほんのきもち。

いつもあそんでくれるおにいちゃんに、あたしはぬぎたてのばんつをプレゼントした。おにいちゃんはんどうしているのか、ぼんやりとしたためあたしをみつめていた。なんだかきゆうにはずかしくなってきた、あたしはばんつをおしつけたまま、おうちのほうこうへはしった。

ずいぶんとはしったところでふりかえると、おにいちゃんはまだぼうぜんとしているようだった。よつぼどうれしかったらしい。ほんとうにばんつをあげてよかった。ちよつとはずかしかったけど、これでおにいちゃんがよろこんでくれるなら、べつにかまわない。

ベッドのなかであたしはかんがえる。

はやく、おとなになりたい。おひめさまみたいにゆうがにおどるんだ。

まどのそこからサイレンのおとがきこえる。けど、あたしはそんなことかまわずにへやのでんきをけした。

おやすみなさい。あしたもいいひになるといいな。

(おわり)

J C 天国

蓮見

現役 J C——いや、コードネーム【漆黒の破壊者】の覚醒は誰よりも早い。

我が名はミカ。十四年前、奇しくも此の世界に生を受けてしまった、地獄の異端児。かつて地獄の皇太子であるベルゼバブは我をこう称した——胎より出でた時から世界に忌避されてきた非業の阿修羅姫、と。

「うん……？」

枕元に置いてあったのは、母御からの手紙だった。地獄から転生する際に腹を借りただけの縁——所詮、あの女は普通の人間にすぎぬ——とはいえ、一応今の世界では私の母だ。かりそめの母と言えど、それなりに相手をしてやらねばならぬだろう。

地獄において第七階級の我をわずらわせるなど、人間の分際で過ぎた真似だ。まあ良い。人間は生を受けた時点から原罪を背負っている罪深い生き物なのだ。これ以上業を積んでも変わらないだろう。

『ミカちゃんへ、あなた最近おかしいですよ。誰も居ないのにブツブツつぶやいていたり、変な服を着ていたり……。パソコンばかりに向かっているし、お母さんはミカちゃんがお心配です。お母さんが悪かったのなら謝りますから、どうか元のミカちゃんに戻って……。』

「ふんっ！」

くだらぬ。所詮、人間の女は人間の女ということか。誰も居ない？ あの女がそう認識しているだけだ。まさに浅慮の極み。我には……。【第三の目】を持つ我には見えてい。すでに【奴ら】がすぐ近くに來ているということが。

変な服？ これが地獄の正装だ。人間どもは、同胞の死を悼む際、黒の喪服に身を包む。我は……。【漆黒の破壊者】の異名を持つ我は、常に漆黒の衣を見にまとう。そう、今まで我が葬り去ってきた、天使、悪魔、その他有象無象の死を忘れないために。この手が常に血と死で染まっていることを知らない、かりそめの母は脳内にお花畑が存在しているらしい。漆黒の衣を変な服、で片づけるとはな。無知は罪というが、はたしてそれは本当だったようだ。

ここが地獄ならば、いつも思う。ビリビリに破り捨て

た無能の手紙を足で踏みつけ、我は珍しく溜息をつく。我には元々百人つの能力が備わっている。第一、時空を超越する。第二、我の攻撃を受けた者は皆死ぬ（ただし運命値が高い相手はこの限りではない）。第三、他の存在からの干渉を受けない。第四……。

「……………」

くそつ地獄の魔王は私の記憶に干渉して、前世の戦いの記憶を消去してしまったらしい。我ともあるうものが、第三の能力を発動させるのが遅かったらしい。まあ、あの魔王のことだ。我が胎児であった瞬間——地獄の歴史から考えればほんの一瞬だ——無力な赤子だったときに無理矢理干渉したに違いない。

「ちっ」

思わず舌打ちをしてから、すぐに我は絶対零度の暗黒微笑——これを見た者は、たとえ地獄の門を守る番犬であろうとも死ぬ——を浮かべた。

地獄の魔王の気まぐれもすぎたところがある。それは昔からのつきあいだからわかっている。我は逆に考えることにした。これは、試練なのだ。【漆黒の破壊者】である我を、

一時地獄より追放し、さらなる運命値を獲得してくるといふ試練。使命とも言い換えられるだろう。なにしろ永遠の闘争を繰り広げている天界とは、つねに運命値の争いをしているのだから。

百人つの能力全てを封じられ、さらに前世の記憶を滅茶苦茶にされた我が、瘴気のない世界で生き抜き、かつ【奴ら】との戦いに勝利するのは至難の業だ。

しかし、我はこの使命を完遂してみせる。そう、いずれ魔王に叛逆し地獄はおろか、この世界全体を支配下に置くためにな……ククク。

おっと、独り言が外に漏れてしまうのは私の悪い癖だった。地獄の七大貴族である我が盟友・アモスも言っていたな。さあ、かりそめの母の妄言も一応受け止めたことだ。そろそろ戦場へ出撃しよう。

教室——くだらぬ遊戯場だ——へ入ると、クラスの愚民どもがいつものように、やかましくさわいでいた。そろいもそろって、私の漆黒の衣を馬鹿にしたように笑っている。しかし、やはり奴らは愚民だ。【第三の目】を覚醒させてい

ない無能力者に我の漆黒の翼は見えないらしい。ここが地獄だったならば、即刻我の永久追放呪文で消え去っていただろうに。つくづく悪運の強い奴らだ。おっと、そんな運命値の低い人間どもの相手はしてられない。我には大事な……野暮用があるんでね。我はなおもぎやあぎやあわめく愚民どもをねめつけると、【彼女】に会うため、屋上へ向かった。

フフフ、かなり気が触れている奴のことだ。我が少しでも約束の時間に遅れたとしたら、暇つぶしにその辺の人間を虐殺してしまうかもしれない。前の大戦では禁忌の剣を振るって、我が同胞を殺戮した奴のことだ。人間を殺すのなんて、グールを屠るよりもたやすいだろう。

「ようこそ、僕の【独裁の園】へ」

【彼女】こと、【穢翼の墮天使】は、いつも通り憂鬱そうな顔で我を出迎えた。屋じよ……【独裁の園】は、彼女の遊び場だ。数か月前、【穢翼の墮天使】は【独裁の園】を封じていた鎖を引きちぎり、制圧して自分の場所にした。

一般生徒、つまり愚民どもは立ち入りを禁じられている

が、【能力者】である我らには関係のないことだ。我らはくだらぬルールなどには縛られぬ。

「最近どうだ？ 【墮天使】」

「疼くね。数日前から【あの時】の傷痕が疼くんだよ……！」

!? まさか【墮天使】も気づいているのか!?

——【奴ら】の到来。それは此の世界の終焉を意味する。

我だけでなく、【墮天使】まで【奴ら】の到来を認識しているとすると、これは確実だ。……！ 我の探知能力が戻ってきている……!?

魔王が干渉してきている、つまり、最終戦争くアールマゲドンくが近いのか!?

「いや……イスカリオテ機関の人間が、僕の存在を嗅ぎつけたらしい」

途端に緊張が解けた。芝居がかった調子で【墮天使】は続けた。

「最近運命値が低い相手とばっかやってたから、退屈だったんだよ。だから僕としては大歓迎だね」

「ふん、地獄に堕ちてなお最強の天使としての力を維持している貴様のことだ。千年ぼっちの歴史しかないヴァチカンの新参どもに倒されはしないだろう」

「ふん、地獄に堕ちてなお最強の天使としての力を維持している貴様のことだ。千年ぼっちの歴史しかないヴァチカンの新参どもに倒されはしないだろう」

「無論 暇つぶし程度になることを願っているよ、ま、仮に機関の奴らが僕を倒せると夢想しているならば、それは儂い願いとして終わるだろうけどね」

【墮天使】は意味深に右目を覆っている包帯を撫でてみせた。【墮天使】——此の世界はサオリという仮の名を持っている——の包帯が外されたときこそ、真の最終戦争のはじまりだろう。【第三の目】の解放……それは全能力を発動することを意味する。

魔王によって能力を封じられている我とは違い、【墮天使】は自ら人間の世界に来ることを選択した変わり者だ。気が触れているという噂は本当だった。が、奴の実力は本物だ。この我にもはかりしれないものがある。

「傷痕が疼く。いらいらする。人間どもはなんで僕たちの力に気づかないんだろかね？ いい加減虐殺したくなってきたらうよ。ねえ【破壊者】さん？」

「……やめておけ。まだそのときではない」

「……そっかー【破壊者】さんがそうなら、僕はやめておくよ。あいにく僕は墮天使といえども天使だからね。むやみやたらと殺戮しようとする悪魔とは違うからね」

「……どつちが悪魔だ」

【墮天使】は形容しがたい表情のあと、クスクスと笑った。

「あ、【はじまりの鐘】の音がするよ」

人間でいうところのチャイム——【狂気の鐘】が我らの時間の終わりを告げた。ここからは人間どもの支配する時間。気に食わないが、それがこの空間でのルールだ。従順に振る舞わなければ、不審に思った教師が我らの正体に感づくかもしれない。そうなればますますこの世界で生き抜くことが難しくなるだろう。

【墮天使】もそれを知っているようで、けだるそうな表情を浮かべながらも、一応授業には向かうらしい。

「行こう、【破壊者】さん……じゃなくてミカ」

「ああ、そうだな。【墮天使】……いや、サオリ」

我らもこの時間からは、かりそめの名前呼び合うことにしている。なんだか落ちつかない気分になるが、しかたがあるまい。

——【奴ら】が来るにはまだ早い。ノストラダムスが預言した世界の終焉は未だ来ない。しかし、我らは知っている。——最終戦争の存在を。 【終劇】

JK天国

蓮見

現役JKの朝は早い。

オキローコロスズビツチとやかましく騒ぐ目覚まし時計を渾身の力で殴りつけると、鋼鉄の機械は鈍い音を立ててそのまま動かなくなつた。あたしはあわててベッドから滑り落ちた九か月のつきあいの相棒君を抱き上げる。しかし彼は全く反応を返さない。

こんな超絶美少女JKのハグに感謝しない目覚まし時計なんて、うんこの混入したカレー以下の存在だ。それにか弱いJKの一撃くらいで動かなくなってしまうなんて耐久性が低すぎる。日本のものづくりの精神はどこに行つてしまったのか。

腹を立てたあたしは、もはや不要となつた鉄の塊を右手で粉碎、そのままゴミ箱にダンクシュートした。

騒音発生装置を処分したあたしは、今日が月曜の朝という最悪のブルーデイだということを忘れて鼻歌を歌つてい

た。部屋の中を見回してみると、モノが一つなくなつただけなのに、とてもすつきりして見える。こういうのを何と言うんだっけ。ロハス？ まあ良い。そういう小難しいことは他人に任せることにしている。頭を使うとお肌が荒れちゃうから。目下のところ、あたしの頭の中に入っているのはファッションとスイーツと下ネ……恋バナだけで良い。

JKと言えばミニスカート。あたしの学校はうざつたい先生がいっぱいいて正直面倒だけど、一つだけすごく良いところがある。制服がめちゃくちゃかわいいのだ。長さはひざ上三十センチ。祭東町内の学校でダントツに短い。少しでも動けばパンツが見えてしまいそうな長さだ。あたしはそれをさらに短くすべく折る。とにかく折る。容赦なく折る。無慈悲に折る。JKパンツは見せるためにあるのだ。

ただし丸見えはいただけない。ありがたみが薄れてしまつて勘違いする男が出てくるかもしれないし、それに何よりチラ魅せコーデを好むあたしの美学に反する。

制服に着替えたら次はメイクの時間だ。化粧水と乳液と保湿クリームでしっかりと守られたあたしの肌は、いつも通り極上スイーツのごとく艶めいたオーラを保っている。

猫のキャラクターが微笑む鏡に映るあたしの姿はまさにアルティメットエロスガール。もちもちの肌に日焼け止め効果つきの下地クリームをまんべんなく塗りこみ、さらに昨日買ったばかりの高機能ファンデーションをはたく。と、並行して眉を整え、学校イチの美少女顔を作っていく。

最近流行の少し青みがかったピンク色のチークをのせ、ルーージュを引いてグロスを塗ってぼつり唇ができれば完成だ。

普段なら次に髪の毛のセットをするのだけど、今日は省略なぜって？ 愛を見つけないためだ。

恋愛はルックスと行動力が決め手だ。絶滅危惧系大和撫子型美少女JKのあたしがルックスにおいて無敵なのは当然として、問題は行動力の方だ。天下無敵のJKだって女の子。いくら恋愛市場においてもはやされていても、弱気になってしまう時だってあるのだ。

ちよっぴりナーバスになってしまった昨日のあたしに、親友のサオリは言った——ミカわやさしぎるんだよ！

サオリの二重の意味で適当なアドバイスは、あたしの心

を強く動かした。そうだ。今までのあたしは優しすぎたんだ。どんなに強いめっちゃモテオーラを発していたとしても、それが正しく活用されていなければ意味がない。優しすぎるとも良くないことだったのだ。

だからあたしは考えた。こんなあたしを変えなくちゃならない。あたしは理想のイケメン王子様に愛されるために生まれてきたのだ。断固として変わらねばならない。手始めに部屋にあった恋愛マンガを全部捨てた。ただしエロいページは切り取って保管した。処分したマンガの代わりに男子が好むような少年マンガを並べた。いわゆるラブコメというジャンルのものだ。

そこに描かれていたのは、あたしのような超絶美少女をたくさんはべらせた、ちよっとオタク入ったイケメン主人公。美少女JKに囲まれた彼の生活は、まさに天国。これぞハーレム。煽るような汚い手書き風文字をゆっくりと眺めながら、あたしは確信した。ここにあることを全て実践すればイケメン王子様に見初められてルナティックハネムーンを迎えられるはず。

百二十一 人目の彼氏(予定)こそあたしの運命の人！

物陰に潜み、標的が来るまでひたすら待つ。息を殺し、誰にも察知されないように気配を消してあたしは静かに「その時」を待っていた。

右手にはケータイとゲーム機とメイク道具とお菓子が入った学生カバン。超ミニスカを身にまとったあたしは全人類の憧れ・超絶美少女JK。ただいつもと違うのは口元。ぼつりセクシー唇なのは変わらない。違う、そうじゃない。いつもと違う点……それは口にパンをくわえているところだけだ。

イケメン主人公が、ちよっぴりあわてんぼさんなパンをくわえた美少女JKとぶつかり、恋に落ちる。ラブコメではよくあることらしい。昨日仕入れた知識だが、あたしの脳内にはしっかりインプットされている。あたしって天才。マジ天才。JKとしては最強クラスじゃない？ だってあたしってスリランカの首都だって知ってるし。トンキンだっけ？ マジすごくない？ 昔だったら表彰モンだよな？ あれ、日本ってどこと戦争してたんだっけ？ 四国？ まあいいや。あんま興味ないし。

そうこうしているうちに、あたしの百二十一人目の彼氏

候補の足音が近づいてきた。ずいぶんと急いでいるらしく、息を乱しているのがわかった。彼ったらドジイケメンのようだ。今からどんなに急いでも授業開始時間には確実に遅刻してしまうのに。それでもあたしの愛は、彼がイケメンである限り変わらない。まだ顔を確認していないが百戦錬磨のあたしにはわかる——この足音の主はイケメン！

ミカはやさしすぎるんだよ！

サオリの言葉が脳内にがんがんと響く。わかっている。親友の適当なアドバイスはあたしの心にちゃんと届いている。だから変わるんだ。絶対が変わってやるんだ。昨日までのあたしとは違うんだ。優しいだけのあたしとは違うんだ！

「童貞は今すぐ死ぬ！」

瞬間、あたしは物陰から王子様候補の前に飛び出し、シヤニングウイザードを極めていた。この一見辛辣に思える言葉は、あたしなりにツンデレ系ヒロインを体現してみたくもりだ。男はすべからくツンデレが好きらしく、冷たくすればするほど惚れるものらしい。事実、あたしが購入したマンガでは主人公は決まってその後デレデレになっていた。これを「ツンデレ反比例の法則」と名づけよう。

シャイニングウイザードを喰らったあたしの彼氏(予定)は歓喜の一声を上げながら泡を噴いてそのまま倒れた。ダメ押しで肘打ちを腹に入れると、ウツという低い声を漏らして王子様は動かなくなった。

……。

やりすぎた？ あたしちよっぴりツンツンしすぎちゃった？ そんなわけないもん。これが新世紀ツンツンヒロイン像なんだから。褒められてしかるべきだ。

こういう時は普段培った女子力を発揮するしかない。王子様はもうピクリとも動かない。そのヘタレ根性をあたしのスピリチュアル看護で変えてあげる！

そんな時あたしの目に留まったのは、さっきの決めゼリフトとともに地に落ちた無残な姿となったパンだった。本能があたしに「もつと女子力アップだゾ」とささやいている。あたしは本能に従うことにした。パンを無造作に取り上げ、そつとイケメンの泡を拭いたのだ。あたしって最高。発想の転換力マジヤバイ。コロンブスも全裸で逃げ出しそう！

……でもあたしの有頂天は長く続かなかった。泡を拭いて現れたのはイケメンとはとても言えない、むしろなんて

いうか、こんなの誰も望んでない。違うブツ。そう……。

「チェンジ！」

JKは顔面偏差値が五十以下の男には微笑まない。四十以下など論外だ。三十？ 蟻の行列を眺めていた方がマシなレベルだ。このあたしが朝からイケメンを待っていたと言うのに、こんなのひどいよ。ひどすぎる。神様なんていないんだね。

あたしは絶望のあまり童貞野郎の股間を踏みつけておいた。こうしておけば当日の当たるところには出てこないだろう。童貞に人権はないんだから。

当然のように遅刻したあたしは職員室で担任の大目玉を喰らうことになった。むかつく。パンツあげるから許してよ、と取引を持ちかけたがあの女子力ゼロのBB Aは鼻で笑いやがった。後悔するなよ、JK。パンツは天然記念物で転売すれば恐ろしい値段で売れることを知らない、昭和生まれのBB A。

ぷりぷり怒りながらあたしは廊下を渡って教室へ向かった。すでに午前の授業は終了している。教室の窓際にはい

つものようにあたしの親友、サオリがニヤニヤ笑いながらフルーツ牛乳を飲んでいた。

「遅かったねミカ。またクラスの男と遊んでたの？」

「クラス？ もう学年の目ぼしい男は食っちゃったけど」

「ミカさんマジビッチ」

「ただのビッチじゃない。あたしは上品ビッチJKだもん」

「じゃあサオリはセレビッチJKね」

サロンでゆるふわに決めた髪をいじりながらサオリは得意そうに笑った。あたしたちの友情は永遠不滅。もう千回くらいプリクラ撮ったし、大好きなスイーツは半分こしあうし、ケータイもおそろいだし、良い男を発見したら真っ先に取り合いになっちゃうし。あ、最後のは違うか。でも男の趣味まで一緒なんてあたしたちマジ親友。

「ところでミカ。忘れてることはない？」

「え」

サオリはニヤニヤ笑いながら、第三ボタンまで開けたシャツを大胆にも胸が見えるか見えないかというところまでまくりあげてみせた。

「……男子(※ただしイケメンに限る)に見えるんじゃない？」

「見せてんのよ」

「そっかー」

チラリと見えるサオリの胸は、目測で約百八センチ。悔しいが理想のおっぱいだ。お風呂で見せあいこした時、あたしはこれまで生きてきてはじめて心底「悔しい」と感じた。サオリのに比べたらあたしのは地平線だ。不毛地帯だ。

揺れる乳が欲しい。心底欲しい。

大縄跳び大会で数回跳んだあと、胸を押さえて「いったい」とほざいたサオリが本気で憎たらしかった。視線だけで人を殺せるならば、あの時サオリの胸は嫉妬光線によってこの地上から消失していただろう。あまりの悔しさにあたしは大縄跳び大会を途中でサボって帰ってその辺の男と寝た。パンツもあげた。

ふと気づくとサオリが挑発的な視線をクラス委員長に注いでいた。やめろ。その草食系メガネ男子はあたしが四月から目をつけてたんだ。サオリもあたしが好物は後にとつとくタイプだって知ってるくせに誘惑しやがって。

トカゲのようにペロペロと唇を舐め回しはじめたサオリの口に、あたしは無言でキャンデーを突っ込んでやった。

そっだ。あんたなんかそいつを舐めてるのがお似合いだ。むしろあたしのケツを舐めろ。そっだ。あたしには胸がなかつたって尻があつたんだ。完全無比な桃尻。学年中の男子垂涎の素敵なヒップ。一度は顔をうずめたいと夢想するだろっ理想の尻。

『巨乳にあらずんば女にあらず』

キャンディーを長い舌で舐めまわしながらサオリが突然つぶやいた。

「何それ」

「昔えらい人は言いました、『巨乳にあらずんば……』」

「もう聞いた」

「大事なことから何度でも言うわよ」

言うなりサオリはシャツを脱ぎ捨てた。クラス中の男子の視線がサオリに集中する。その双丘を瞳に焼きつけんとする、血走った、ある意味殺気にも似た眼光。しかしそこにあつたのは彼らの予想とは大きく違う光景。

「……サオリ」

「今日は身体測定よ、ミカ。忘れてたの？」

乳首にしたり顔の猫のキャラクターの絆創膏を貼りつけ、

ノーブラ状態でサオリは微笑んでいた。惜しげもなく豊満な胸(たぶんFカップだろう)を見せつけ、彼女は勝利者の表情を浮かべていた。前方で獣の咆哮にも似た歓声が上がらる。クラスの男子たちだ。彼らは口々に巨乳女の勝利を叫んでいた。許せない。サオリがあたしに完全勝利するなんて五か月くらい早い。それにしてもクラスの元童貞どもの裏切りは許せない。お前らの半分以上はあたしで卒業したくせに。超絶美少女JKが相手してやったんだから、永遠の忠誠を誓うべきだ。

腹を立てたあたしは、おもむろにスカートをまくりあげ、そのまま脱ぎ捨てる。どよめきが広がる中、あたしはちよいエロスマイルを保ったまま、レースの透けパンをぎりぎりまでずり下ろしてみせた。

「……！」

身体を這うように集中する視線が心地良い。どうだ見たか、サオリ。これが大和撫子の流儀だ。これぞチラ魅せ。これぞ国宝。サオリお前に名誉ビッチを名乗る資格はない。尻全部を露出してしまえばそれこそ犯罪だ。しかもあたしは上品ビッチ。女子力の高いビッチだ。あたしは自分の武

器を知っている。白くてもちもちの抱き心地の良い肌とスレンダーなボディとその他諸々、挙げていけばきりがながともかくおっぱい以外だ。おっぱいが水平線だということとは認めよう。しかし他の全ての部分であたしはサオリに勝っている。

あたしだって巨乳はうらやましいと思う。嫉妬に狂ってその辺の男に抱かれた夜もある。けれどあたしは今悟ったんだ。胸より尻が勝っていると。でかいだけの乳はいつか垂れるけれど、小ぶりな、いやちっぱいは人類の愛に包まれているから重力に負けることなんかないのだと。

——あたし、負けない。巨乳なんか屈したりなんかしないんだから！

「やるわね、ミカ」

「あんたもよくやるよ。さすがセレビッチね。サオリ」

「言うね、上品ビッチ」

がしつと力いっぱい抱き合うあたしたちの姿に、クラス中の男子が再び歓喜の声を上げる。抱擁とともに、乳が揺れる。尻が震える。柔肌どうしが擦れあう。地球の贈り物とも言ふべきその光景は、超絶美少女JKたちの繰り広

げる奇跡のカーニバル。

なんだか教室の外が騒がしい。

様子をうかがう。誰かがちくつたのか、職員室から担任のBBAがかけつけたらしい。ヤバイ。あたしたちの極上ボディを披露しているところを見られたら、BBAが嫉妬のあまりあたしたちを呪殺するかもしれない。

BBAは教室のドアを乱暴に開け開口一番、こう言った。

「なにやっつてんのあなたたち!! 先生もまぜなさいよ!!」
突然脈絡もなくスーツを脱ぎだしたBBAを、クラスの人間はあぜんとした表情で見つめている。

「……サオリ」

「ミカ……ええ、そうね」

あたしは巨乳に屈したりなんかしない。BBAの服からはみでている乳は確かに大きいと言えよう。ただし一つ致命的な問題があった。乳と腹が同じサイズだったのだ。つまりくびれの全く存在しない悪い意味でだらしない身体。

「……『我デブが巨乳を名乗ること、断じて許すまじ』」

「は？」

「古代賢者は何度も言いました、『我デブが巨乳を名乗ること

と、断じて許すまじ』と」

サオリの瞳が怒りで燃えていた。サオリの瞳に映るあたしの瞳にも同じように怒りの炎が猛つていた。このBBAは世紀のJKショーを邪魔し、しかもあたしたちに並び立ちとうとしたのだ。毎朝チラ魅せでサラリーマンの目を楽しませ、将来の働き手である男子学生の癒しとなっている、言うなれば日本経済を陰から一心に支えているあたしたちに。これは国辱モノだ。天誅あつてしかるべきだろう。

乳を丸出しにしているBBAはぼかんとした表情であたしたちを見つめていた。

あたしは渾身の力で床を蹴る。同時にサオリも跳躍する。数瞬後、BBAの顔面にスワンダイブ式フェニックススプラッシュと不知火が炸裂した。

(……あたしたち、必殺技の系統(※跳躍系)まで似てるなんて、やっぱ親友だね……)

空中を舞うサオリの瞳がそう語っていた。深く心の中で頷く。パンツはその過程で脱げた。紐パンだったせいだろうか。地上に落下するパンツを男子どもが群がって拾おうとしている。あたしはそれに構わず、BBAを地に叩きつ

けた。

「……」

BBAを葬り去ったおかげで、午後の授業と身体測定はなしになった。サオリは胸囲測定が中止になったことをしきりに悔しがっていたが、あたしは正直心の中でほっとしていた。あたしがサオリに胸囲で勝つ可能性は方に一つもない。尻なら勝てるけれど、大きければ良いってもんじゃない。だいたい尻測定なんて存在しない。

ノーパンになったおかげで風が吹くたびスースーする。あのあとあたしの貴重なパンツはクラス中の男子の間で争奪戦になり、激しい戦いの末にただの布つきれに成り果てたらしい。残った糸クズさえも奪いあいになったそうだから、まあ、あのパンツも浮かばれるだろう。

「きゃっ」

五月の風は涼やかで、マイナスイオンがびゆるびゆる出ていて心地の良いものだったが、今のあたしにとっては危険だ。さすがにノーパンで歩くのは初体験だから、名譽ピッチであるあたしでも、いちいちビクンビクンしてしまう。

こんな危険な下校なんてはじめてだ。

不意にスカートが引つ張られるのを感じた。いくら寛容な上品ビッチのあたしでも、路上で脱がされるのは趣味じゃない。ただでさえ今日はノーパンなのだ。

思いきり怖い顔をしてそいつを睨みつける。

そこにいたのは性欲にまみれた男などではなく、幼い女の子だった。

意外すぎる相手に戸惑っていると、女の子はわずかに怯えた表情を浮かべながらもぺこりとお辞儀をしてみせた。

「あ、あの今朝は助けてくれてありがとうございました」

何のことだかわからず、首をかしげているとその子は恥ずかしそうに続けた。

「今朝の痴漢……倒してくれたの、お姉ちゃんですよね？」

……ああ。あのあたしの期待を裏切りやがったブサメンは痴漢だったのか。痴漢顔だと思っていたらどうやらモノホンだったらしい。しめしめ、また善行をしてしまったみたい。マジあたし天使じゃん！

「私、何もできなくて……弱くて……人に頼りっぱで……」
女の子はうつむきながらつぶやいた。よく見ればこの子、

伏し目がちではあるけどかなりの美少女だ。将来超有望。

「れなちゃん」

彼女の親友とおぼしき子が遠くから呼びかけている。遊びの途中だったらしい。あわてて「れなちゃん」と呼ばれた女の子はその子に向き直り、「まってーさえちゃん」と答えた。

「本当にありがとうございました……それじゃ！」

「れなちゃん」は「さえちゃん」の方へ走って行った。揺れる空色のワンピースがかわいらしい。あたしはなんだかほっこりした気分になった。なんて言うんだろう、こういうのがスピリチュアル体験って言うのかな。

夕焼け空に向かってあたしは思いつきり深呼吸した。

幼女よ、JKになれ。できるのならば超絶美少女ビッチになれ。

……あたしはもう一度微笑んだ。

(終)

※よいこのみんなへ みんなはこんなJKになるなよ！

※このお話に登場するJKは実在の女子高生と全く関係ありません。また登場人物は全て十八歳以上です。

月刊缶じうす五月号 通巻179号

2012年5月2日発行

編集人 蒼井天優 石川裕子

発行所 広島大学文団BOX